

## シンポジウム「今, 自然史系博物館は…」を終えて

松岡敬二<sup>1)</sup>

日本古生物学会の第146回例会が豊橋市自然史博物館で開催されるにあたり, 博物館をテーマにしたシンポジウム「今, 自然史系博物館は…」を企画した。1991年に千葉県立中央博物館で開催したシンポジウム「新しい自然史学と博物館」以来6年が経過し, 自然史系博物館をとりまく諸事情の変化がその背景にある。第一に新しいスタイルの大型自然史系博物館や大学博物館の建設があった。第二に日本古生物学会会員の10%近くを博物館で働く学芸員等が占めるまでになり, 学芸員の研究活動が学会の研究活動や学問の普及教育活動の一翼をになうようになっていく。第三に自然史系博物館の館長職にある人に古生物分野の人が意外と多く, 博物館活動に影響を与える立場にあることである。

そこで例会の目的を21世紀に向けて, 自然史学の発展への先導役としての博物館の役割や現在の学芸員の地位や研究条件を向上させるための糸口を探ることとした。

シンポジウムの参加人数は, 学会会員及び豊橋市市民を含む一般の参加者も加えて約200人であった。会員の中には, 博物館関係者ばかりか大学関係者も含まれていた。これは, 大学博物館の構想のある大学や学芸員資格履修コースのある大学関係者にとってもタイムリーな内容だったからであろう。また, シンポジウム開催についての案内は, 学会の広報以外にも豊橋市の広報誌等に掲載した。さらに全国の博物館や大学へはポスターによる配布も行った。

シンポジウムの構成は, 松岡敬二, 大石雅之, 青島陸治の世話人を中心に連絡を取り合い, 最終的に国立科学博物館分館で世話人と発表者が集

まり, 内容を決定した。

その内容は, 学芸員の処遇, 待遇の現状, 調査研究, 標本の管理・登録, 展示についてとなり, 現在多くの時間をさかれ, ルーチン化している普及教育活動は省略した。また, 発表者の構成も, 国, 県, 市, 町の博物館の人にお願ひし, 一つの演題に対して複数の発表者を立てた。これは, 発表に客観性をもたせ, 異なる規模の博物館の現状を反映するねらいがあった。以下がプログラムの内容である。

- (1) 趣旨説明(豊橋市自然史博物館 松岡敬二)
- (2) これからの博物館の役割と機能-欧米の自然史博物館の最近の事例に学ぶ-(国立科学博物館 真鍋 真・千葉県立中央博物館 森田利仁・国立科学博物館 斎藤靖二)
- (3) 博物館における研究の重要性-ローカルからグローバルへ-(神奈川県立生命の星・地球博物館 松島義章)-再びグローバルからローカルへ-(横須賀市自然博物館 蟹江康光)
- (4) 博物館展示のこれからのありかた(富山市科学文化センター 後藤道治・滋賀県立琵琶湖博物館 高橋啓一・大阪市立自然史博物館 樽野博幸)
- (5) 将来に向けての標本管理・利用(国立科学博物館 斎藤靖二・東北大学理学部 森 啓)
- (6) 博物館の現場からみた学芸員のかかえる諸問題(岩手県立博物館 大石雅之・福島県立博物館 竹谷陽一郎・信州新町化石博物館 成田健)
- (7) 総合討論

発表は, 現在の日本の自然史系博物館の現状を具現した内容であった。欧米と比較して日本の博

1) 豊橋市自然史博物館:  
〒441-3147 愛知県豊橋市大岩町字大穴1-238

キーワード: シンポジウム, 自然史系博物館, 自然史学, 学芸員, 古生物学会

博物館の人的な整備の遅れから派生する問題が強く印象づけられた。博物館の運営に関して、キーパーソンとしての学芸員の位置づけは、新井(1954)にみるように「博物館法」が施行された昭和26(1951)年直後よりかわっていない。学芸員問題を先送りにしてきたことにより、地方自治体が博物館を設置するときの目的と、その後の現場の活動をつかさどる学芸員の意識とのずれが問題点として表面化しているともとらえられる。上記のような問題点を含んだ日本型博物館の未熟さからの脱却が今後、日本の博物館の行方を左右しているといえそうである。

総合討論では、いくつかの貴重な意見をいただいた。九州大学名誉教授の松本達郎氏からは、自然災害に対する標本(正基準標本、従基準標本)の管理についての質問がだされた。国立科学博物館の現状について、標本棚からの落下防止策や火災に対する現状が紹介された。

東海大学自然史博物館の柴正博氏からは、私立大学の大学博物館の動向やその例が紹介された。神奈川県立生命の星・地球博物館館長の濱田隆士氏からは、シンポジウムの計画のあり方や、他の自然史系の博物館との連携について及び博物館の館長のあり方など多角的な面からの指摘をいただいた。椋山女学園大学教授の糸魚川淳二氏からは学芸員の処遇の問題や自然史学の現状から、博物館の存在がメジャーとなるようにとの要望がだされた。最後に、日本古生物学会会長の池谷仙之氏は自然史学の発展につながるように、学会が一つの媒体として博物館の活動をサポートしたい意向を示された。これらの指摘は、自然史学の研究が、大学、研究所、博物館が一丸となって取り組むことの重要性がいっそう求められる時期にきていることを物語るものである。

濱田(1997)が本シンポジウムの感想として、「日本の学芸員の現状に対する不満があふれているのに、それに対する成案が出されなかったこと、大学

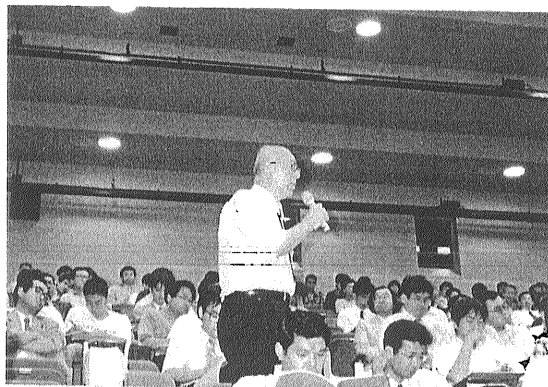


写真1 総合討論で発表する濱田隆士氏。

の研究と博物館の研究と研究のあり方についての根本的な論議に至らなかったこと」を指摘した。日本の博物館がかかえている問題の縮図が、学芸員が抱える問題として現れたのであって、短時間の論議で煮詰まるものではなかった。今後の博物館に所属する学会の研究者にとっては、学問の存続のために活動しやすい体系化が求められている。これらの総合討論の内容や結果については、十分な論議ができなかったことも踏まえ、次回のシンポジウムへの橋渡しと考える。

豊橋市自然史博物館で日本古生物学会を開催するにあたり、博物館関係のシンポジウムの開催に許可を頂いた評議員および関係者の方々にお礼申し上げます。また、地質ニュースの特集号としてシンポジウムのポストプリントを発行していただいた通商産業省工業技術院地質調査所地質標本館館長の豊遙秋博士に感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 新井重三(1954):自然科学学芸員論。博物館研究, Vol. 1. Nos. 4-5, p.171-198.  
 濱田隆士(1997):博物館の、いま歩むべき道。博物館研究, Vol. 32, No. 8, p. 5-11.

MATSUOKA Keiji (1998): Summary of symposium "Natural History Museums at present".

<受付:1998年10月1日>